

【野生動物】 短 報

札幌市豊平区羊ヶ丘にて採集されたナキイスカ *Loxia leucoptera* の剖検記録

吉野 智生^{1,2)} 川路 則友³⁾ 浅川 満彦²⁾

1) 釧路市動物園 (〒085-0201 北海道釧路市阿寒町下仁々志別11)

2) 酪農学園大学獣医学研究科 (〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582)

3) 森林総合研究所北海道支所 (〒062-0045 札幌市豊平区羊ヶ丘7)

(受付2014年7月22日)

要 約

2014年4月に札幌市豊平区羊ヶ丘にて採集されたナキイスカ *Loxia leucoptera* 1個体を剖検し、その所見及び各種の身体計測値を記録した。剖検時肉眼所見として、皮下脂肪痕跡的であり、一部筋萎縮と軽度肺炎像が得られた。諸臓器および消化管内は空虚で、内部寄生虫は認められなかった。これらの所見から、斃死の原因は特定されなかった。

キーワード：ナキイスカ、剖検記録

-----北獣会誌 58, 548~550 (2014)

ナキイスカ *Loxia leucoptera* はスズメ目アトリ科に属する小型鳥類で、スカンジナビア半島北部からロシアにかけてと北米に分布し、カラマツ、モミ、シラカンバ、ナナカマド等の落葉針葉樹林または針広混交林に生息する^[1,2]。本種には3亜種が知られ、そのうち亜種ナキイスカ *L. l. bifasciata* が主にヨーロッパ、ロシアで繁殖し、中央アジア、中国東北部等で越冬することが知られている^[1,2]。この亜種ナキイスカはまれに日本にも冬鳥として渡来し、北海道でも時折記録される^[3-5]。今回、筆者らは札幌市豊平区羊ヶ丘にて採集された本種1個体の死体について、剖検する機会を得た。国内において本種を含む野鳥の計測、解剖結果に関する報告は少ない^[7]。また、斃死体を利用した野鳥の正確な計測値の記録およびそれに基づく種同定は、ある地域に生息する鳥類相の把握と生態系の評価のため重要であり、死因の推定、病原体の検索および遺伝子情報を含むサンプルの蓄積は、博物学および獣医学的に重要であるため、本報ではその結果について報告する。

材料及び方法

2014年4月8日、札幌市豊平区羊ヶ丘の森林総合研究

所北海道支所内の実験林にて、樹の根元に落ちていた野鳥1個体が回収され、同支所標本館にて冷凍保存された。その後、同個体は酪農学園大学野生動物医学センター (WAMC) に搬送され、各種の検査が実施された (同施設カルテ番号 AS14380)。作業者の安全性確保のため、インフルエンザウイルス簡易試験キット (エスプライン A インフルエンザ、富士レビオ、東京) およびウエストナイル熱ウイルス簡易試験キット (WNV/SLE Vec Test、米国 Medical Analysis Systems, Inc., Camarillo, CA、米国) を用いて、それぞれのウイルスのスクリーニング検査を実施した。いずれのウイルスについても陰性であることを確認した後、個体の体部計測および外部寄生虫検査を実施した。剖検は常法に従って実施し、羽毛付きの皮膚は仮剥製の証憑標本として WAMC に保存された。その後、臓器の一部は今後の比較検査用試料とするため、WAMC 内の冷凍庫 (-20℃) に冷凍保存された。

成績と考察

本個体の計測値は、以下の通りであった。体重23 g、全長145 mm、翼開長242 mm、自然翼長87 mm、最大翼長88 mm、翼差34 mm、翼幅54 mm、尾長56 mm、露出嘴

連絡先著者：浅川 満彦 (e-mail: askam@rakuno.ac.jp)



図1 ナキイスカ 雌成鳥 背面



図2 同 腹面



図3 同 頭部

峰長16.2 mm、全嘴峰長20.2 mm、嘴高10.1 mm、嘴幅9.4 mm、全頭長34.3 mm、およびふ蹠長13.7 mmであった。本個体は嘴が太く交差しており、翼に2本の明瞭な白帯があることにより、ナキイスカと考えられた^[1,2]。体羽は全体的に黄緑色であり、頭部から背中にかけて灰色味が強いこと、体上面および腋の羽に黒褐色の縦斑が

あること等により、メス成鳥であると同定された^[1,2]。類似した種にイスカ *Loxia curvirostra* があるが、翼の白帯が明瞭であり、大雨覆先端部の白帯の最大幅が9.1 mm であること（イスカの変異個体では境界が明瞭ではなく、通常1–2.5 mm）、肩、上背面の羽及び下尾筒がやや暗色が強く、体上面や腋の羽に縦斑が無いこと、尾長/翼長比が0.64であること（イスカでは0.56–0.61）などから、ナキイスカであると考えられた^[2,6]。北海道におけるナキイスカの記録は数年に一度程度の割合で散見され、直近の記録として、2011年3月および5月にそれぞれ札幌市で飛来が確認されている。本例は、2014年は3年ぶりの記録となる^[3,4]。

インフルエンザウイルスおよびウエストナイル熱ウイルスの簡易検査はいずれも陰性であった。また、外部寄生虫検査も陰性であった。外部所見としては明瞭な出血および骨折は認められず、換羽も認めなかった。剖検時肉眼所見として、皮下脂肪は痕跡的で胸筋の軽度萎縮を認めたが、全身的に著しく消瘦しているとは判断されなかった。体腔内臓器では、肺に軽度肺炎様の病変と、肝臓周縁部および頭蓋骨内に死後変化と思われるうっ血を認めたが、直接の死因とは考えられなかった。また実体顕微鏡下で諸臓器および消化管を精査したが、胃は空胃であり、内部寄生虫は認められなかった。皮下脂肪がほとんどなく、胸筋の萎縮を認めたこと、当該個体の体重は23 gであり、既報における標準体重をやや下回っていること（ロシア：ムルマンスク：29–34 g、ヤマル半島：24.9–35.3 g）^[2]などから、栄養不良、衰弱により死亡した可能性はあるが、直接的な死因は不明であった。

日本国内に飛来した本種鳥の身体に関する情報が乏しいことから、貴重な情報として本個体の情報を記録した。

引用文献

- [1] Brazil MA : Birds of East Asia, Princeton Publishing, UK (2009)
- [2] Cramp S, Pernis CM, Brooks DJ (Eds) : Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa, The birds of the Western Palearctic Volume 8, Crows to Finches, Oxford University Press, UK (1994)
- [3] 藤巻裕蔵：北海道鳥類目録改訂4版、極東鳥類研究所、美唄市（2012）
- [4] 石狩鳥類研究会：石狩鳥報2013、石狩鳥類研究会、石狩市（2014）
- [5] 日本鳥学会：日本鳥類目録改訂第7版、日本鳥学会、

-
- 東京 (2012)
- [6] Svensson L: ヨーロッパ産スズメ目の識別ガイド (村田 健訳)、文一総合出版、東京 (2011)
- [7] 高川晋一、植田睦之、天野達也、岡久雄二、上沖正欣、高木憲太郎、高橋雅雄、葉山政治、平野敏明、三上 修、森さやか、森本 元、山浦悠一: 日本に生息する鳥類の生活史・生態・形態的特性に関するデータベース「JAVIAN Database」、*Bird Research*、7、R9-R12 (2011)